

コメント： 初期キリスト信仰者の自己定義とユダヤ教との関係

村山 盛葦

(はじめに)

この発題において浅野氏は初期キリスト教の著作から『バルナバ書簡』とイグナティウス書簡群を選び、特にユダヤ教との関係が見られる箇所を取りあげられました。原文にあたりながら、かつ、主要な先行研究と対話しながら、原文の意味と時代背景、そしてこれらの書簡の著者がどのようなユダヤ教理解とキリスト信仰をもっているのかを注意深く、丁寧に考察されました。

浅野氏は、ヘブライ語聖書に説明されているモーセの契約、食事規定や割礼、赤毛の仔牛について、そしてエルサレム神殿について、どのように『バルナバ書簡』の著者がキリスト論的に解釈しているかを説得的に論証されました。『バルナバ書簡』の著者はキリスト論的聖書解釈に基づいてユダヤ教を論駁しています。その解釈は寓意的であります。この書簡は紀元後二世紀初めごろにアレクサンドリアで執筆されたと想定されていますが、それより少し以前の時代に、同じ地域で活躍したユダヤ人哲学者フィロン（前20年～後50年頃）が同様に寓意的解釈を駆使しながら、ヘレニズム世界に向けてユダヤ教を弁論しています。このことは寓意的解釈が同じテキスト（聖書）を用いながら、全く異なる結果を導き出すことを示しており、この種の解釈がもたらす幅の広さを改めて確認できます。寓意的解釈は、宗教や立場に関係なく護教的な目的に用いることができる便利な方法といえます。同時に、このことは、聖書解釈の基準について問題を提供していると思われる。寓意的解釈は主観的価値判断によって支配されています。そのため歴史的・客観的判断はほとんど役割をもっていません。主観的価値判断に強く影響を受けた解釈は正しいのか、誤りであるのか、あるいは、一つの解釈として立ちうるのか、という問題があると思います。ある研究者は『バルナバ書簡』の聖書解釈は「帽子からウサギを取り出す手品師のようだ」、と形容するほどであります¹⁾。

イグナティウス書簡群に関して、浅野氏は書簡群の反対者の正体を、キリスト信仰共同体の一致を脅かすユダヤ的傾向を持つ者（おそらく「神を畏れる者（異邦人）」）として捉えています。キリスト信仰共同体の分裂を防ぐためにイグナティウスは反対者の教えとキリスト信仰の教えとを峻別し、『バルナバ書簡』の著者と同じく、ヘブライ語聖書に対するキリスト論的解釈を展開していることが明らかとなりました。ヘブライ語聖

書という「古文書」に権威をおく者に対して、イグナティウスはイエス・キリスト、そして彼の十字架と死、復活、そこから与えられるキリスト信仰を「古文書」として示しています。この認識に基づいた聖書解釈はイグナティウスが危惧する共同体のアイデンティティの喪失を防ぐために機能している、と浅野氏は考察されました。

この発題を通して、『バルナバ書簡』の著者とイグナティウスが、キリスト信仰者の自己定義を樹立するためにユダヤ教との分離を明確にしようと試みていることが分かりました。キリスト信仰はユダヤ教と継続しておらず、ユダヤ教は間違った宗教であり、ユダヤ人は自分たちの聖書を正しく理解しておらず、キリスト信仰者が唯一正しく聖書を理解している、と。彼らがユダヤ教を否定し、キリスト信仰の正統性を主張していることが分かりました。これは、キリスト信仰者の共同体を形成していく重要な作業の一環であったと思います。これに関して、筆者は浅野氏の主張に基本的に同意するものです。その上であえていくつかの問題を提起したいと思います。

1. ユダヤ教からの分化あるいは未分化

『バルナバ書簡』で展開している議論はどの程度アレクサンドリアの事情を反映しているのか興味があります。多くの研究者はこの書簡の内容からユダヤ教から独立したキリスト教というものを想定します。浅野氏も基本的にその立場であると思うのですが、逆に、ユダヤ教とキリスト信仰者のグループの分離が明確でないからこそ、『バルナバ書簡』の著者が寓意的聖書解釈を通して、明示的分離を論証したのではないかと想定することはできないでしょうか。

これは、書簡を解釈する上で常に提起される問題であります。つまり、書簡の内容が歴史的事情をどれほど反映しているのかという問題です。少なくとも、『バルナバ書簡』の著者はユダヤ教とキリスト信仰者の分離を明確に認識していたと言えるでしょう。しかしこのことを、アレクサンドリアのユダヤ教とキリスト信仰者の実情に当てはめることができるのかどうか、という問題です。パウロ書簡を考察する際にも当てはまる問題です。

たとえば、3.6に「わたしたちが改宗者としてあの人たち（ユダヤ人）の律法に当たって砕けてしまわないよう（破船しないように）」（佐竹訳。カッコは筆者の付加）とあります²⁾。

原文 3:6 “hina mē prosrēssōmetha hōs prosēlytoi tō ekeinōn nomō”

英訳 “in order that we might not shipwreck ourselves as proselytes to their law”³⁾

これをどう解釈するのでしょうか。『バルナバ書簡』の著者はキリスト信仰者が騙されてユダヤ化することを心配していると解釈できないでしょうか⁴⁾。この解釈が正しければ、キリスト信仰者とユダヤ教徒が密着していたこと、つまり、ユダヤ教とキリスト信仰者の分離が未分化であった状況を想像することは出来ないのでしょうか。

イグナティウス書簡群に関しても同様の質問をしたいと思います。ユダヤ教とキリスト信仰者の集団との区別は特にシリアにおいては困難であって、その境界は流動的であったと考える研究者がいます⁵⁾。シリア地方からマタイ福音書（80年代）、ディダケー（1世紀末～2世紀初頭）が産出されています。イグナティウス書簡群はこのような地域の状況に対して、ユダヤ教とキリスト信仰者の集団との明確な区別を提示するために創出されたと言えないのでしょうか。ユダヤ教とキリスト信仰者の集団の境界があいまいであるため、その区別の確立を目指すことが執筆目的の一部であったと考えることはできないのでしょうか。この見方に立つならば、手紙の内容が直接的にアンティオキアを含むシリア地方の事情を反映しているのではなく、その逆である、ということになる。

例えば、次のテキストをどう解釈するのでしょうか。『マグネシアのキリスト者へ』の手紙10.3に「イエス・キリストを語ってユダヤ教的に生きるのはおかしいことです。なぜならキリスト教がユダヤ教に基礎づけられるのではなく（信じたのではなく）、ユダヤ教がキリスト教に基礎を置くのだからです（信じたからです）」（八木訳。カッコは筆者の付加⁶⁾）。

原文 10:3 “atopon estin Iēsūn Christon lalein kai. iūdaizein ho gar Christianismos ūk eis Iūdaismōn episteysen all’ Iūdaismos eis Christianismōn”

英訳 “It is utterly absurd to profess Jesus Christ and to practice Judaism. For Christianity did not believe in Judaism, but Judaism in Christianity”⁷⁾

このテキストが代表するように、確かにイグナティウスはユダヤ教とキリスト信仰（者）とを峻別しようとしています。しかしこのテキストは同時に、キリスト信仰を持つ者でユダヤ教的に生活する者がいたことを示している、と解釈できないのでしょうか。この解釈をとるならば、このテキストはユダヤ教とキリスト信仰者とが完全には分離していない事情を示していることになるのではないのでしょうか。これらの質問に関連して次の問題を考えて見たいと思います。

2. クムラン教団との比較

浅野氏は「特徴的なキリスト論的で霊的な解釈をとおして、著者はヘブライ語聖書、契約、神殿の意味を再定義し、神に対する誤ったアプローチを続けるユダヤ教とは異なる

るアイデンティティをキリスト者共同体へ提供するのです」(p.5)と結論づけています。『バルナバ書簡』が提示している霊的解釈による斬新な聖書解釈は、新しい共同体の形成に寄与するという主張は理解できます。しかしそれがユダヤ教内の共同体形成なのか、ユダヤ教外のそれなのか議論ができるのではないのでしょうか。その典型的事例としてパウロの共同体形成をあげることが出来ると思います。寓意的な解釈による斬新なヘブライ語聖書解釈はパウロにも見られるものです（ガラテヤ書4章のサラとハガルのたとえ、1コリント書10章4節の霊的な飲み物と霊的な岩・キリストなど）。パウロは同胞ユダヤ人の救いを希望していること（ロマ11章26節）などから、ユダヤ教内に留まっていると想定することができると筆者は考えています。このような視点は『バルナバ書簡』には見当たりませんので、その意味で『バルナバ書簡』の著者はユダヤ教から分離することを目指していると主張することは可能です。しかし、すでにふれたようにユダヤ教とキリスト信仰者が密着し、双方が未分化であるならば、ユダヤ教のサークル内に『バルナバ書簡』を位置づけることが可能ではないのでしょうか。

例えば、『バルナバ書簡』の聖書解釈は、ユダヤ教内聖書解釈に位置づけることはできないのでしょうか？この点に関連して、クムラン教団の聖書解釈とユダヤ教指導部への辛辣な批判が参考になると思います。

初期キリスト教の時代、ユダヤ教は決して一枚岩ではありませんでした。そこでは神学思想や聖書解釈の違いによって多様なグループが形成され、それぞれが独自に活動し、ときには激しくぶつかり合うこともありました。しかしどのグループもユダヤ教を否定したのではなく、同一の神の意思について正しい理解を追究しながら、それぞれの立場を弁論していったと思われまます。『バルナバ書簡』の著者にとって、キリスト信仰が神の啓示であり、トーラーの啓示であったと思われまます。神の戒律によって記された啓示の道が信仰生活でありました。この著者は二つの道について倫理勧告を展開しています（『バルナバ書簡』18-20）。この種の倫理勧告はディダケー1-6やクムラン教団の文書（『宗教要覧（1QS）』など）にも見出されるものです。キリスト信仰者は「義の道に関する知識」を受け取った人たちであり（*hos echōn hodū dikaiosynēs*）、「闇の道へ」（*eis hodon skotūs*）と歩む人たちとは区別されています（『バルナバ書簡』5.4）。ディダケーの二つの道の教えとは異なり、『バルナバ書簡』は黙示的（宇宙論的）二元論をもっており、この点でクムラン教団に近いと思われまます。二つの道の倫理勧告は、それぞれの道に相反する天的（霊的）な勢力が君臨しており、死の道に至る究極の権威は「今の不法の支配者（サタン）」であるとされています（『バルナバ書簡』18.2）。クムラン教団は激しく当時のエルサレム神殿体制を批判し、自分たちが唯一正しい律法解釈者であり、教団の成員が「神の民」を形成しているという強い信念をもっていました。クムラ

ン教団は、エルサレムの神殿祭儀は完全に誤っており、偶像礼拝と等しい神への冒瀆を体現しており、「闇の天使」に支配されている、と考えていたようです。同様に、『バルナバ書簡』の著者は、ユダヤ教は神の意思を誤解し、ユダヤ教律法は「悪い天使がまどわしたために (hoti angelos ponēros esophizen autūs)」(『バルナバ書簡』9.4)、神の言葉を間違っ表している、と論じています。『バルナバ書簡』は繰り返し、この世は邪悪であり、敵(悪魔)がいつもこちらを狙っていると考えています(2.10「悪しきもの(=悪魔) ho ponēros」、4.10「黒い者(=悪魔) ho melas」、4.13「悪い支配者(=悪魔) ho ponēros archōn」、9.4「悪い天使 angelos ponēros」、18.1「サタンの天使たち angeloi tū satana」)。この悪の勢力にユダヤ教は捕えられてしまっていると著者は考えているようです。

エルサレム神殿体制とユダヤ教指導者たちを激しく非難したクムラン教団はユダヤ教そのものを否定したわけではありませんでした。『バルナバ書簡』の黙示的(宇宙論的)二元論に裏打ちされたユダヤ教批判やユダヤ教的律法解釈に対する批判についても同様のことが言えるのかどうか、それについてどうお考えでしょうか。

注

- 1) Simon Tugwell, *The Apostolic Fathers* (London: Geoffrey Chapman, 1989) 22.
- 2) 荒井献編、『使徒教父文書』、講談社、1998年、45頁。
- 3) M. W. Holmes, *The Apostolic Fathers: Greek Texts and English Translations*, third ed. (Grand Rapids, Michigan: Baker Academic, 2007) 387.
- 4) Tugwell, *The Apostolic Fathers*, 23.
- 5) 例えば、Anthony J. Saldarini, *Matthew's Christian-Jewish Community* (Chicago: University of Chicago Press, 1994) 11.
- 6) 荒井献編、『使徒教父文書』、174頁。
- 7) Holmes, *The Apostolic Fathers*, 209.